

## 第38回防衛問題セミナー議事録

日時：平成29年6月23日（金）14：00～16：00

場所：埼玉県県民健康センター（大ホール）

演題：弾道ミサイルの脅威に備えて ～BMD構想と政府の取り組み～

・防衛省防衛政策局防衛政策課防衛政策企画官 飯島 秀俊

「北朝鮮情勢と弾道ミサイル防衛について」

・内閣官房副長官補付 内閣参事官 伊藤 敬

「Jアラートによる弾道ミサイル情報の伝達について」

### 【司会】

それでは、ただいまから、北関東防衛局主催第38回防衛問題セミナー「弾道ミサイルの脅威に備えて～BMD構想と政府の取り組み～」を開催いたします。まず、主催者であります北関東防衛局長平井啓友より、開会のご挨拶を申し上げます。

### 【平井北関東防衛局長】

こんにちは。北関東防衛局の平井と申します。本日はお忙しい中、このように大勢の方々防衛セミナーにお集まりいただき、本当にありがとうございます。また、日頃から防衛省・自衛隊にご理解、ご協力をいただきありがとうございます。この場をお借りしてお礼申し上げます。

北関東防衛局は、防衛省の地方出先機関ということで、全国に8箇所ある防衛局の1つです。所掌している範囲は、北は新潟県の佐渡分屯基地、南は太平洋上の硫黄島、南鳥島航空基地に至る1都7県を所掌しております。主な業務の内容につきましては、自衛隊及び在日米軍が活動するにあたっては、様々な影響を周囲に及ぼしますが、その影響に対する地元との調整や、例えば、飛行場等の周辺における騒音等の影響に対する対策事業、自衛隊・米軍が使う用地の取得・管理、事件事故等も含めた補償関係業務、基地内での建設工事、また、本日の防衛セミナーのように防衛の広報活動についても力を入れているところです。

本日の防衛セミナーは、弾道ミサイル防衛をテーマに企画をしました。ご存じのとおり、我が国周辺の安全保障環境が非常に厳しくなっています。特に、朝鮮半島内におきましては弾道ミサイルが立て続けに発射され、昨年から今年にかけては、30発を超える弾道ミサイルが発射されているという状況になっています。このような軍事的な動きは、朝鮮半島の緊張を高めているばかりではなくて、我が国を始め、国際社会に対しても重大かつ差し迫った脅威となっていると思えます。今まではまさかというような気持ちでいたものが、ここ最近ではもしかしたらという気持ちに変わってきているというのが、現状ではないかと思っています。

このような現状を踏まえて本日は、防衛省防衛政策局、飯島企画官にお越しいただいて、昨今の北朝鮮の情勢や、弾道ミサイル防衛に向けての話をしていただきます。また、内閣官房からは伊藤参事官をお招きして、仮に弾道ミサイルが国内に着弾するような恐れが生じたときに、政府から国民に対してどのような形で情報が伝わるのか、をテーマにお話をさせていただきます。限られた時間ではございますが、本日のセミナーを通じて、我が国の防衛に対する取り組みについて、さらに理解を深めていただければと思っております。

最後になりますが、当セミナー開催にあたり、多くの方々にご協力いただきました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。以上、簡単ですが、主催者からの挨拶とさせていただきます。本日はご来場、本当にありがとうございました。

#### 【司会】

続きまして、今回のセミナーを後援していただいております埼玉県と自衛隊埼玉地方協力本部を代表しまして、自衛隊埼玉地方協力本部の長谷川晃久1等空佐よりご挨拶を頂戴いたします。長谷川1佐よろしくお願ひいたします。

#### 【長谷川1等空佐】

皆さんこんにちは。自衛隊埼玉地方協力本部の長谷川と申します。本日は第38回防衛問題セミナーということで、非常に多くの方々に参加していただきまして、誠にありがとうございます。

埼玉地方協力本部の活動を紹介させていただきますと、埼玉県における自衛官の募集、広報、そして退職する隊員の再就職援護といったことを行っております。また、大規模災害、あるいは有事に際しまして初動対応ということも行っております。また、平素は自治体の方々との連携を図るための一環として、防衛問題セミナーにもご協力させていただいております。本日は、その一環といたしまして、我々は様々な活動を行っているという一連の流れの中で、ここ浦和地区において防衛セミナーを開催するというので、我々も後援という形でご協力させていただいております。

先ほど、平井局長からありましたように、北朝鮮につきましては、度重なる国際社会の非難にもかかわらず、弾道ミサイル発射実験を繰り返しております。その実験結果から分かる能力は、我が国、そして国際社会にとって大変な脅威となっております。伊藤参事官からお話があると思いますが、日本全国で弾道ミサイルに対する避難訓練が開催されております。皆さんにつきましても、弾道ミサイル対処について強い関心がおありだと思います。

本日は「弾道ミサイルの脅威に備えて」ということをテーマにいたしまして、北朝鮮情勢、そして我が国の弾道ミサイル防衛、そしてJアラートについて、非常に見識があるお二人からご講演を頂けるということでございます。どうかこれを機会にいたしまして、我が国の弾道ミサイル対応、そしてまた、皆さんご自身、弾道ミサイル攻撃があった際に、こういった行動を取れば良いのかということについて認識を深めていただければと思います。また

我々地方協力本部におきましても数人参加しております、我々も一緒に勉強したいと思っております。限られた時間ではありますが、どうかよろしくお願いいたします。

#### 【司会】

それでは、講演に入らせていただきます。最初に、防衛省防衛政策課飯島秀俊企画官にご講演いただきます。講師の略歴は、お配りしたプログラムの裏面でございます。平成28年4月から、現職の防衛省防衛政策局防衛政策課防衛政策企画官に就かれております。それでは、飯島企画官よろしくお願いいたします。

#### 【飯島防衛政策企画官】

皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただきました、防衛省の将来の政策的なことを担当する防衛政策課というところで、弾道ミサイル防衛も担当している課の企画官をしております飯島です。よろしくお願いいたします。

本日は北朝鮮情勢と弾道ミサイル防衛ということでお話をさせていただければと思っております。北朝鮮は昨年2回の核実験、さらに20発以上の弾道ミサイルを発射しており、今年になっても10発以上の弾道ミサイルを発射しています。このように、北朝鮮は核やミサイル開発により、ミサイルを色々な形で飛ばす運用能力を非常に向上させており、我が国を含む地域、さらに国際社会にとりまして、まさに新たな脅威となっているところです。今日は始めに、北朝鮮情勢についてご説明させていただいて、その後、弾道ミサイルによる攻撃に対して、我が国を防護するために導入している弾道ミサイル防衛システムについてお話しをさせていただきたいと思っております。できる限り分かりやすくご説明させていただきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

最初に北朝鮮を含めた我が国全体を取り巻く安全保障環境について、非常に簡単ですがご説明いたします。我が国周辺にある中国、北朝鮮、ロシアというのは表にあるとおり、陸上、海上、航空における兵力は全世界でトップレベルに入っているということです。例えば、中国で申し上げれば、陸軍の兵力が160万と全世界で1位となっており、海軍も航空軍も非常に兵力があります。ロシアの方は、海上兵力では全世界で2位の軍事力を持っているということです。北朝鮮も、陸上兵力は全世界で3位です。私がこのスライドで申し上げたいのは、我が国周辺というのは、非常に大規模な軍事力が集中するという特異な地域であるという厳しい安全保障環境にあって、さらに北朝鮮の軍事力が色々と加速しているということです。

このような中で、主要な各国の国防費の変化ですが、例えば、中国はここ10年で3.4倍、今日は北朝鮮がテーマということで中国の話はあまりしないと思っておりますが、中国の場合で言えば、国防費がここ40年で40倍になっています。それはもちろん中国の経済が成長しているということもあるのですが、先ほど申し上げたような非常に兵力が集中しているという事実の中でこういう国防費の伸びがあります。北朝鮮については、明らかに

相当な額を使っているとは思いますがデータがなく、ロシアが4.62倍、中国が3.4倍、韓国が1.72倍になっているというところです。日本はここ10年間で1.01倍であり、安倍政権になって防衛費が0.8%ずつ伸びているという状況ではありますが、その中でも1.01倍ということです。先ほど申し上げたように、非常に厳しい国防兵力、軍事力が集中する中で、各国はこのようにしてまさに国防費を増加させる傾向で、兵力を高めているという状況です。

これまで、国防兵力と国防関係費、我が国の周辺の安全保障関係を述べてまいりましたが、実際、どのようなことが起きているのかというのがこの図です。北朝鮮については後ほど詳しくご説明させていただこうと思いますが、中国については、先ほど申し上げたとおり軍事力の強化ということと、特に尖閣周辺や東シナ海で活動を活発化し、南シナ海で、埋め立てなどを行っているということです。

ロシアは、冷戦終結後、活動は衰えていたのですが、ここ最近では活動を活発化し、北方領土に部隊を配備しているという状況です。このように周辺諸国での活動も非常に活発になっているというところです。その中で北朝鮮について、これから詳細にご説明させていただきたいと思います。

北朝鮮につきましては、金正恩体制の下で、まさに核実験、弾道ミサイル発射という活動をしているということで、我が国周辺の安全保障環境が非常に厳しい状況の中、防衛省・自衛隊は、北朝鮮、中国の活動というものに直面しながら活動をしているところです。

次のページ以降で、北朝鮮について詳しく説明させていただければと思います。こちらの朝鮮半島の図で説明していきます。ご案内のとおり、朝鮮戦争が終わった後、朝鮮半島では半世紀以上にわたって南北の分断状態が続いています。DMZ非武装地帯は大体北緯38度線沿いになっているのですが、ここには南北合わせて150万という陸軍の兵がおり、世界で見てもこれだけ陸軍の兵が集中している所はありません。

こちらの兵力の比較を見ていただければと思います。先ほどご説明したとおり、北朝鮮は世界第3位の陸軍国です。兵力は119万人で、全人口の5%が軍人だということです。これは日本で考えますと、ちょうど昭和18年ぐらいの日本です。北朝鮮はそういう戦況が悪化していたころの日本の状況にあるということです。

先ほど、北朝鮮は陸軍が約100万人という国であると申し上げましたが、このスライドで一番ご理解していただきたいのは、北朝鮮の陸軍の兵員は多いものの、北朝鮮が持っている兵器という装備の大半は旧式だということです。こちらに様々な装備品が書いてあります。こちらのT55戦車やナジン級のフリゲートですが、これは韓国や在韓米軍の装備品と比べて、非常に古いというのが特徴です。例えば、戦車はT55ですが、これは第二次世界大戦で使っていたような、非常に古いものだということと、こちらのナジン級フリゲートという船で、トン数で言えば1,500トンですが、韓国が持っている世宗大王（セジョンデワン）というイージス艦、これは日本が持っているイージス艦と同じようなものですが、こちらは7,000トンとなっています。1,500トンというのは、大体旧日本海軍の駆逐

艦みたいなレベルのものです。このように北朝鮮が持っている装備は陸軍中心であり、かつ古い装備品ということです。北朝鮮はそういう中で、どのように立ち向かおうとしているかというところを次のスライドでご説明したいと思います。

装備品は古く、通常兵力では韓国軍および在韓米軍に対して著しく劣勢であるという中で、北朝鮮はどのように考え、どのように利用しようとしているかという、彼らは並進路線を進めていこうと考えているということです。この並進路線とは何かということですが、2つのものを同時並行で行っていこうというものです。そのうちの1つが核武力の建設で、これは何かというと核兵器とそれを運ぶための弾道ミサイルに資源を集中して行っというものです。戦闘機や艦船などを全て揃えるにはお金がないので、核兵器と弾道ミサイルに資源を集中して投資して行っというものです。核を持っているアメリカの脅威に対抗するためには独自の核武力が必要ということで、核武力を建設していくことによって、本来であれば通常の兵器である戦闘機や艦船などで対抗するにはものすごくお金が掛かるところを、核武力に集中投下をして、その分、経済建設のほうに北朝鮮の資源を振り分けていこうという方針です。そういうこともあり、核実験や弾道ミサイルを数10発も発射している、今まさに並進路線というものに基づいて、北朝鮮の政策は行われているというところ

です。

この並進路線、核武力建設と経済建設というのは、去年、朝鮮労働党の大会というのを36年ぶりに開催しましたが、その場でも確認をして、この方針で進めていこうというように言っているところ。この金正恩委員長の発言は、この並進路線が国防費を増やさなくても、少ない費用で国の防衛力を一層強化しながら、経済建設と人民の生活の向上という大きな力になるということです。繰り返しになりますが、核武力の建設ということで、アメリカの核の脅威に対抗するというのが、まさに大きなポイントで、この政策として核実験と弾道ミサイルを発射させているというところになっております。

次に、おさらいですが、弾道ミサイルとは何かということです。弾道ミサイルというのは、この図にあるとおり、放物線を描いて飛翔します。要するにロケットのエンジンで推進力をえて打ち上がるということです。ちなみに右側に巡航ミサイルがありますが、この前、アメリカがシリアを攻撃するときにトマホークという巡航ミサイルを使っています。巡航ミサイルというのは、基本的に飛行機と同じような原理で、飛行機と同じように海面すれすれを飛んでいきます。命中精度が高く、攻撃目標を特定すると追尾をしながら飛ぶという非常にハイテクなものなのですが、こちらの弾道ミサイルというのは、いわばローテクなものです。より重い物、弾頭というのを遠くに飛ばすということを考えて作っていますので、北朝鮮のような国でも作れるということです。

また、弾道ミサイルは、まさに長距離にある目標を攻撃するものであり、非常に速度は速いです。例えば表にあるとおり、弾道ミサイルの区分としては、短距離のミサイル、中距離のミサイル、あと大陸間弾道ミサイルがあります。これは距離毎に1,000キロ以下と、1,000キロから5,500キロ、5,500キロ以上と分かれていますので、例えば

1,000キロ以下のミサイルですと、大体10分で1,000キロ飛んで行くということになります。ですから、例えば平壤の辺りから発射されたミサイルは1,000キロちょっとで、東京も範囲に入りますので、10分くらいで飛来するということです。

そんな弾道ミサイルを北朝鮮はどれくらい持っているかということですが、このページにあるとおり、様々な種類の弾道ミサイルを今北朝鮮が開発して保有していると言われていいます。一番短い弾道ミサイルでトクサというものが射程120キロです。最近色々話に出ているノドンというミサイルで大体射程が1,300キロです。一番長いものになると、後ほど紹介するテポドン2の派生型は1万キロぐらい射程があるのではないかと考えているところですが。

次の図は、平壤を中心として同心円を描いて1,000キロ、1万キロはどれぐらいかを説明した図です。一番長いものと言われるテポドン2派生型で、1万キロ以上飛ぶと言われていいます。仮にこの平壤から撃った場合には、アメリカ西海岸や中部のデンバーぐらいまで届くというような距離があるということです。先ほどのノドンというミサイルを北朝鮮は数百発持っていると言われていっていますが、その射程が1,300キロです。平壤から飛ばしますと、大体北海道の東部と沖縄以外は全てカバーする形になっていると言われるミサイルを数百発持っているということです。

昨年、今年と非常にミサイルの発射の数が多いのですが、こちらの図は、彼らのミサイル発射の歴史と言いますか、これまでの発射の状況について示したものです。最初に我が国の上空、東北の青森県のあたりですが、1998年8月に我が国の上空を超えるミサイルを発射したことがありました。大体1,600キロ飛んだのではないかとということです。昔はテポドン地区というところの活動が多かったということで、この地区にミサイルを発射する地上発射サイトがあります。これは地上の発射型のサイトで、例えば種子島にあるようなH2Aロケットを打ち上げるような発射台から打ち上げるということです。それが1998年8月と、その後2009年4月、これはまさに秋田・岩手の上空を超えて飛んだということです。

その後、先ほどご説明した1万キロ飛ぶのではないかとされているテポドン2派生型のミサイルは、こちらの東倉里、北朝鮮の西岸から飛ばしたものです。北朝鮮は人工衛星を飛ばすのだと言って、長い射程の弾道ミサイルを飛ばしたのですが、フィリピンの方に2012年、2016年の2回飛ばしています。これ以降の2016年の話は、この後、詳細にご説明させていただきたいと思っております。

これは去年あった事案を一覧表にしたもので、ここで申し上げたいのは核実験です。去年の1月6日、新年早々に核実験をしております。核実験は2回、ミサイル発射は合計23発というような挑発行為があったということです。ちなみに、今年もすでに合計9回のミサイル発射が行われています。

細かくなりますが、最近のミサイル発射の例を簡単にご説明させていただきたいと思っております。これは、先月の5月29日に発射したものです。4月に北朝鮮は軍事パレードを行い

ましたが、その中で、幾つか今まで見たことのないようなミサイルが登場したということです。大体ミサイル発射が成功した翌日に、朝鮮中央放送や労働新聞で成功したという映像を流したり、新聞記事を出したりします。そういうところから、いろいろ分析ができるのですが、まさにこのミサイルというのが、その4月の軍事パレードで見た新型ミサイルの一部なのではないかと考えております。こちらは羽根が付いているミサイルと考えられ、大体400キロ飛びまして、佐渡から500キロ、隠岐諸島から300キロという我が国のEEZの中に落下したというように考えております。先ほど申し上げた様に、発射した後、大体こういう労働新聞という新聞で、嬉しそうな顔をした人が出てきて、発射した様子が写真やテレビに映るということになっております。これが先ほど出てきました羽根みたいなものがあって、軍事パレードで使った新型ミサイルと同じではないかというような分析ができるということです。彼らは大体、労働新聞やテレビにこんな成果がありました、ということを発表するのですが、これの一番大きな成果というのは、このミサイルは羽根が付いているため、着弾するときに色々調整できるということで、予定目標の7メートルの誤差という正確な命中ができるというような説明をしているということです。

ここ最近の発射は、大体全てパレードで出てきた新型ミサイルの発射が多いということで、先月も合わせて3回、3週連続でミサイルを発射したということです。大体土日に発射することが多いのですが、これは珍しく夕方に撃たれています。これもパレードで出てきた新型ミサイルではないかというように言われています。こちらの特徴、これも労働新聞と朝鮮中央放送の図が出ているのですが、コールドローンチというやり方で、発射の筒からポンと飛び出しており、その後点火をするという方式で、予兆なく色々準備をしなくてもすぐ発射できるような機能を持っているということです。これも非常に技術が進んでいるのではないかと考えております。この労働新聞は、このミサイルを実戦配備しましょうということを言っているところです。

次は、5月14日、これも午前5時28分頃発射したというミサイルです。このミサイルは、高度が2,000キロ以上高い所まで飛ばして着弾させたというのが大きな特徴であり、30分程度ずっと高いところまで飛んでいたというのも特徴です。これも4月15日のパレードで出てきていたものと考えられ、また嬉しそうな顔でガッツポーズをしているところです。非常にわかりにくいですが、ここにモニターがあり、2,000キロまで行くとすごく高い放物線を描くということが写っているということです。北朝鮮は労働新聞で、このミサイルは2,111.5キロまで上昇したと発表し、北朝鮮より787キロの公海上の設定された目標水域を正確に打撃したということを言っております。北朝鮮はある周辺諸国が完全に攻撃範囲内に入ったと言っており、米本土と太平洋作戦地域が範囲内に入っているということを強調しているということです。

これが最後です。最近の事例ですが、これは一度に4発のミサイルを同時に発射して、そのうち3発は日本海のEEZの範囲内で、1発は外ですが、男鹿半島から西に300から350キロの範囲内にほぼ同時に着弾させたという事案です。こういうこともやってきてい

るといふことで、これもまた彼らの映像を公表しております。この写真ですが、まず4発同時に発射したといふようなことを言っており、さらに、これはご参考なのですが、日本を攻撃目標だといふようなことを言っている例があります。今までは先ほどの労働新聞で言っていたのですが、2017年5月、北朝鮮の外務省の報道官が日本領土内にある米国の侵略的軍事対象ですとか、我々の標的は変わるしかないといふ色々な話、さらに、米国よりも先に日本列島が丸ごと焦土化されるといふ話が出てきているのも、結構大きな事案ではないかといふように思っております。

今までの弾道ミサイルの動向に関してまとめをさせていただければと思っております。それぞれ次以降のスライドでご説明をさせていただきます。まず、こゝういふ長距離ミサイルの信頼性が向上しています。ミサイルの撃ち方をどんどん変えてきており、発射の形態が変わってきているといふことと、今まで配備している全てのミサイルの技術も上がってきているといふことをご説明します。

まず、最初です。これは少し前のスライドです。朝鮮半島西側からフィリピンの方に撃ったミサイルがありました。これは北朝鮮が人工衛星の打ち上げとして撃っているのですが、そういうものを2回ほぼ成功させているといふことです。射程1万キロとも言われるこのテポドン2派生型といふのも2回発射を成功させています。さらに、去年9月の写真ですが、こゝういふエンジンの発射の実験といふことで、まず長距離、1万キロにも及ぶような弾道ミサイルの技術を向上させているのではないかといふのが1つのポイントだと考えております。

2つ目です。これは、撃ち方をいろいろ変えています。先ほど申し上げたテポドン地区には、こゝういふ固定式の発射台、種子島宇宙センターの発射台のようなものから打ち上げるのですが、最近はこゝういふTELといふ、車両にまずミサイルを発射するものに乗せて動かすといふような形で発射しています。この写真ですが、車両から移動して隠れながら、移動しながら発射していますので、非常に分かりづらゐ、見つけづらゐといふことがポイントです。さらに最近、弾道ミサイルを潜水艦から発射するものを作ったといふこともあります。潜水艦ですから、海中から発射するため非常に見つけにくい、兆候が非常につかみづらゐといふのが2つ目の大きな特徴です。

3つ目です。先ほどありましたが、いわゆるロフテッドといふものは、通常より高い高度、図がありますが、普通の軌道より高く打ち上げると落ちてくるときに非常に急な角度で落ちてきますので、一般的に撃ち落とすづらゐといふこともあります。そういう能力も向上させているといふことです。

最後に先ほどもあった4発同時に発射してほぼ同じような場所に着弾したといふように、既に関済済みで配備しているミサイルの能力も向上させているといふことです。まさに北朝鮮は、こゝういふ能力を上げてきているといふところではあります。これまでが弾道ミサイルに関する説明です。

次に核開発はどうかといふことです。5回目の核実験が去年の9月にありました。閉鎖的



な国なので、よく分からないことが非常に多いですが、5回も核実験をしていることを考えると、小型化、弾頭化の実現に至っている可能性も考えられるというところです。ちなみに、他の核保有国が、今までに何度か核実験をしています。小型化とは何かということですが、弾道ミサイルに載せるということです。先ほどのように、北朝鮮の持っているミサイルは大体700キロから1,500キロのものを弾頭として先端に載せられるというように考えられており、そこまで核弾頭を小さくしないと載せられないということです。そういうものにするのに、例えばアメリカでは1.37トンのものを作るのに、12回実験をしたということ、フランスや中国ではそういうものを積むのに、3回、5回と実験をしたというところもあります。そういうことも考えると、閉鎖的な国なのでどこまでなのか分かりませんが、技術もある程度進展しているということです。

まとめますと、先ほど申し上げたように、北朝鮮は並進路線を維持して、引き続き行っていくのではないかとということです。今年も何回もミサイルを発射しているということで、引き続きICBM、大陸弾道弾、アメリカ本土まで届くようなものも考えられております。そういうものも含めて、今後、核ミサイルを開発するための活動を活発化していくのではないかと考えているところです。長々となりましたが、これまでが北朝鮮の情勢です。

北朝鮮の弾道ミサイルの開発も含めてですが、我が国に飛来する弾道ミサイルをどのように対処するか、弾道ミサイルの攻撃にどのように対処するかということで、防衛省・自衛隊が導入している弾道ミサイルの防衛システムについて、これからご説明させていただきます。

これは我が国の弾道ミサイルの防衛構想の図です。これを非常に簡単に申し上げますと、二層構造になっておりまして、海上自衛隊のイージス艦が上のほう、高いほうの対応ということです。弾道ミサイルが発射された場合には、まず航空自衛隊のレーダーがありまして、これで弾道ミサイルが飛んできたことを見つけます。見つけたミサイルを追いかけながら、その情報を海上自衛隊のイージス艦に渡し、イージス艦が高い所、大気圏外で迎撃することです。それが迎撃できなかった場合には、この高度10数キロにおいて、航空自衛隊のペトリオットPAC-3というミサイルで撃ち落とすという二段構え、多層防衛になっているというのが大きなポイントです。

それぞれご説明していきます。まずこのイージスシステムは、飛来する弾道ミサイルを大気圏外で迎撃するもので、イージス艦という船には、弾道ミサイルを撃ち落とすミサイルとデータを積んでいます。このイージス艦は3隻で、今、日本全体をカバーできるように考えているところです。こちらは上のほう、上層部、大気圏外で撃ち落とすシステムです。

次のページです。これは大気圏内の10数キロの高さで撃ち落とすペトリオットPAC-3ミサイルというものです。こういうレーダー、アンテナ、電源車など一連の装備の高射隊で、入間基地にもありますが、その中には地上10数キロのミサイルを撃ち落とすものも入っているということです。そういう体制を執っておりまして、現在全国にこのイージス艦が4隻、佐世保、舞鶴、横須賀の各基地に配置しているということです。あと、ペトリオット

トPAC-3ミサイルを全国に配備し、また、ミサイルが飛んでくるのに使うレーダーも全国津々浦々に配備しているというところです。

他方、先ほども申し上げたとおり、北朝鮮の能力が向上しているということもあり、そういう中でどのように対処し、我が国全域を防護しなければならないかということです。北朝鮮は、打ち上げを同時に行うなど、能力が非常に上がってきているということもありますので、今の計画ではイージス艦を4隻から8隻に増やそうということを進めています。

また、ミサイルを撃ち落とす迎撃ミサイルも能力を向上させていこうということで、これが完成しますとイージス艦2隻で我が国全体を防護できるような体制、今は上空で撃ち落とすためには3隻必要なのですが、それを2隻にできるのではないかと考えております。あと、10数キロでミサイルを撃ち落とすPAC-3もミサイルを撃てる範囲を広げるといような改良をしているところです。

さらに、より弾道ミサイルの防衛体制を強化するのに、どのようなことが必要かという研究も行っております。その例がありまして、例えばアメリカは、今、我々が持っていない装備品を整備していますので、そういうものも研究しているところです。これが先ほどご説明した能力向上型のミサイルです。高い高さに飛ばすロフテッドというものへの対処や、同時発射にも対応できるミサイルを開発しており、このように落ちてくる弾頭の標的を落とすといような迎撃実験も行っております。あと、今イージス艦を8隻まで増やして、PAC-3も防護範囲を広げるといことですが、より能力を上げるにはどういことがあるのかといと、これはアメリカが持っているイージス・アショアで、先ほどのイージス艦のミサイルを発射する部分とレーダーを陸上に設置するといようなことが考えられています。また、これはTHAAD（サード）といもので、今、在韓米軍やグアムに配備されているようなものです。こういう防護範囲を色々考えながら、新しい装備品がどういものなのかといことを研究しているところです。これは日本の取り組みです。

最後に、アメリカとも色々協力していこうといことで、日米協力をしております。次のページを見ていただくと分かりますでしょうか、アメリカ軍のBMD、弾道ミサイル防衛のアセットといものも日本に配備されております。例えばこのイージス艦、先日不幸な事故もありましたが、横須賀にミサイルを撃つ能力があるイージス艦が7隻配備されており、今年度夏には8隻になる予定です。

あと、TPY-2レーダー、ミサイルが飛んでくるのを探知するレーダーを青森県のつがる市といところに配備しています。昔の車力村です。京都府経ヶ岬にも配備されております。さらに、嘉手納基地にはPAC-3があり、日本に配備されているものと同じようなものを米軍は配備しているといことです。こういうもので情報の共有等を日米で行っているところです。日本の努力もそうですが、アメリカとも協力をしながら我が国に飛んでくるミサイルに対処するといことを行っています。

最後になりますが、先日朝霞駐屯地でこの訓練を行っていたと思います。昨今、安全保障も厳しく、北朝鮮が色々なミサイルを発射しているとい状況も踏まえて、下層の防衛、下

のほうでミサイルを撃つPAC-3を実際に展開させる訓練を今月に入ってからすでに3回、小牧基地と福岡駐屯地とこの朝霞駐屯地で行っているということで、こういうものを実施しながら、技量を高めていくということも行っていこうと思っております。

以上、長々のご説明をさせていただきました。大変長くなって恐縮ですが、最後まで静粛にお聞きいただいて、どうもありがとうございました。ご説明させていただいた弾道ミサイル防衛システムをきちんと整備して、またそれを運用することによりまして、いかなる事態においても弾道ミサイルの脅威から国民の生命、財産を守るべく万全を期していきたいと考えております。皆さんのご理解とお支えをどうぞよろしくお願いいたします。今日はどうもありがとうございました。

#### 【司会】

どうもありがとうございました。それでは、ただ今の講演内容に関しまして、ご質問がございましたら、挙手をお願いいたします。係の者がマイクを持ってまいります。

#### 【質問者1】

本日はご講演ありがとうございました。先ほど、迎撃ミサイルのことについてお話されていましたが、実際に日本が迎撃ミサイルを打ち上げたときに、北朝鮮やその仲間の国が、北朝鮮が打ち上げたミサイルが止められないよう、日本に何か妨害をしてくることはあり得ますか。

#### 【飯島防衛政策企画官】

様々な妨害活動というのも、もちろん当然あり得ると思います。そういう状況においても、きちんと対応できるように、弾道ミサイル防衛システムを開発していますので、具体的にどういうものがあるか色々考えなければいけないと思いますが、きちんと対応できるように整備を進め、いかなる事態にも備えられるように進めているというところです。

#### 【質問者2】

北朝鮮は、日本に対してミサイルを連続で1発、10発、30発と撃ち込んだ場合、それをペトリオットミサイルで撃ち落とすことができるのか、迎撃戦闘機でそのミサイルを撃ち落とすことができるのか、その辺を聞きたいのですが。

#### 【飯島防衛政策企画官】

北朝鮮が弾道ミサイルを同時に発射する実験をし、そういう能力を上げてきていることは十分に認識しております。そういうこともありますので、イージス艦を増やすことや色々な研究開発をすることで、より能力の高いミサイルみたいなものも開発しながら、同時に発射されたミサイルの脅威に対応していこうと考えているところです。

**【質問者 3】**

地上設置型の防衛システム、イージス・アショアについては、やはり全国をカバーするレベルで設置とかは検討されるのでしょうか。

**【飯島防衛政策企画官】**

今、我々が何を考えて能力を上げていかなければいけないかというのは、我が国全域を防護し得るもの、即応態勢、同時対処、継続的対処というのが、今後ミサイル防衛を強化していくキーワードになると考えております。イージス・アショアの導入を決めたわけではないですが、将来、このような迎撃体制を考えるとときには、やはりこういった能力を持っていないと非常に厳しいのではないかと考えているところです。

**【質問者 4】**

射程の短いミサイルは、大体飛行時間が5分から10分ということだったのですが、今ある弾道ミサイルの迎撃システムで、5分から10分で確実に迎撃できるという見込みと言いますか、確率は非常に高いものなのでしょうか。

**【飯島防衛政策企画官】**

5分から10分で500キロから1000キロ飛んで来るとのことです。そういうものを念頭に置きながら、弾道ミサイル防衛システムを我々は構築しているところです。

**【質問者 5】**

日本海の近くにミサイルが落ちたということですが、その場合、迎撃するかしないかの判断というのは、どのあたりで行うのですか。

**【飯島防衛政策企画官】**

我々が持っている弾道ミサイル防衛システムを使って迎撃する根拠が幾つか法律で規定されています。1つは、日本に対して武力攻撃が行なわれたときと、あと我が国の領域にミサイルみたいなものが落ちてくるときに撃ち落とすというような根拠の規定があります。日本海のEEZと申しましたけれども、それは我が国の領域、領海ではありませんので、基本的に撃ち落とすということはしていないというところです。

**【質問者 6】**

日本列島の日本海側にペトリオットミサイルを1キロ範囲で設置して、撃ち落とせるような体制を作るべきだと思うのですが、数が少ないのではないかと、増設する必要があるの

ではないかと、日本列島北海道から沖縄も含めて1キロメートル範囲の中で、全部で数十箇所  
の設置が必要だと思うのですが、いかがですか。

**【飯島防衛政策企画官】**

我々が作っている迎撃システムというのは、まず上層においてイージス艦で撃ち落とす  
というのが基本であって、それができなかつたらペトリオットPAC-3ということです。  
今あったような1キロずつというお話、お金と人がいればということもあるかと思うので  
すが、なかなか難しいところです。PAC-3を必要なところに展開をしながら、防護体制  
をとるといことや、基地の中を出て必要な方法、対策をとるといようなことを考えてお  
ります。どれだけ必要かというのは、予算のこともありますので、そういうところで議論を  
していくのではないかとこのところではあります。

**【質問者7】**

よく飛ぶミサイルだなというのと、核の小型化というのは分かったのですけれども、威力  
について、よく広島、長崎の何倍だという例えもあるのですけれども、威力はどれぐらいな  
のか教えていただきたいのですが。

**【飯島防衛政策企画官】**

威力はどれぐらいかということに関して、例えば核実験で申し上げれば、去年9月の核実  
験で、推定出力量が大体11から12キロトンと言われております。広島型の原爆というの  
が、15から16キロトンと言われていたところではあります。現在の北朝鮮の核に関して  
は、大体そのような状況というように解釈しているところではあります。

**【司会】**

それでは、これを持ちまして、飯島講師の講演を終わらせていただきます。飯島企画官、  
どうもありがとうございました。

**【司会】**

それでは、続きまして第2部、内閣官房伊藤敬内閣参事官による講演を行います。  
講師の略歴は、お配りしたプログラムの裏面に記載のとおりですが、平成28年6月から  
現職の内閣官房副長官補付内閣参事官に就かれております。それでは、伊藤参事官、よろし  
くお願いいたします。

**【伊藤内閣参事官】**

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました内閣官房の伊藤です。本日は「Jア  
ラートによる弾道ミサイル情報の伝達について」と題してお話させていただきますが、お話

する内容は2点あります。1つは、弾道ミサイルが日本に飛んでくるというような可能性がある場合に、どのような情報をどういった形で皆さんにお伝えするのか、2点目は、そういった情報が皆さんに伝達されたときに、どういった行動をとっていただきたいのか、この2点についてお話をしたいと思います。

それでは最初に、Jアラートについてお話をしますが、正式名称は、全国瞬時警報システムと言います。これは要するに、緊急情報をいち早く国民の皆さんにお伝えするためのシステムです。流す情報としては2つありまして、1つはこの弾道ミサイル情報のようないわゆる武力攻撃情報です。もう1つは、気象警報のうち緊急にお伝えすべきもの、例えば、津波警報だったり、緊急地震速報だったり、そういったものをお伝えするシステムです。具体的にどのような形で情報が流れていくかと言いますと、国の総務省消防庁というところを通しまして、情報がまず流れていきます。人工衛星と地上回線の2系統で必ず確実に届くようにしておりまして、それがまず、市町村の役場等の受信機に届きますと、そこから情報伝達手段が自動的に起動します。要するに、受信情報が届くと、それが自動的に、例えば防災行政無線を動かしたり、あとはケーブルテレビに自動的に流して、あとは市町村が登録したメールを流したりというような形で、住民の皆さんに情報が伝わるようになっていきます。ポイントは自動起動ということです。要するに、人の手を介さずに情報が住民の方に伝わるようになっていくところがポイントで、素早く情報が皆さんに伝わります。もう1系統は、こちらの携帯電話会社の持っている携帯メール、これが携帯電話会社から直接皆さんの携帯電話にメールが届くようになっていきます。呼び方はエリアメールとか、緊急速報メールという言い方をしていますが、この携帯電話会社からの情報伝達もあるということです。

では、このJアラートを使って弾道ミサイルの情報がどのように流れていくのかというと、まず、ミサイルが発射されまして日本に飛来しそうだということになったら、1つ目の発射情報、避難の呼びかけを流します。内容はミサイルが発射されたので、頑丈な建物や地下に逃げてください、避難してくださいということをまず、皆さんにお伝えします。そして、いよいよ日本に落ちてくるということが分かったならば、ただちに避難というようなメッセージを流します。その後、実際に落ちたならば、その落下場所等についての情報を流して、あとは追加情報が必要でしたら流すというような流れですが、最初に発射情報と避難の呼びかけをして、いよいよ落ちてくるということになったならば、直ちに避難してくださいというような情報の流し方をするということです。このほかにも、日本に飛来するかなと思ったけど通過していきましてというケースもあり、その場合には通過した後に通過しましたという情報を流しますし、来るかと思ったけど手前に落ちたという場合には、手前のところに落ちたという情報を流すという流れです。緊迫した状況の場合は、発射情報、ただちに避難、落下場所等の情報が流れるということです。

実際にどんな形でJアラートが使われたことがあるのかということですが、幸いにして日本に落下したことはありません。過去には先ほどのお話にもありましたように、日本の上空を通過したことがありまして、去年の2月7日に沖縄の上空を通過しました。そのときに

は発射情報と通過情報を流しております。このJアラートを用いて情報伝達をする場合には、メッセージのほかに特殊なサイレン音を使って、ミサイルの情報ですということが分かるようにしています。そのサイレン音は2つありまして、1つは、国民保護サイレンというものです。こちらはその情報がJアラートから提供があった場合に、市町村の防災行政無線から流れるものでありまして、独特の警報音となっております。それでは今から流してみます。(サイレン音再生) 全部で14秒のサイレンが鳴ります。このサイレンが聞こえたならば、Jアラートで弾道ミサイルの情報が流れてくるというようにお考えいただければと思います。もう1つのサイレン音、携帯電話のエリアメール、緊急速報メールの着信音ですが、こちらはその携帯電話会社の決めた音が流れてきます。よくある、地震緊急時速報が流れるときに携帯で特殊サイレン音が鳴ると思いますが、それとは別の種類、津波や火山情報などに関するサイレン音が使われることになっています。こちらも聞いていただければと思います。(サイレン音再生) このような音が流れます。これが携帯電話から流れてきたならば、もしかしたらミサイルの情報かもしれないというようにお考えいただければと思います。

続きまして、弾道ミサイルが落下してくるというときに、どういった行動をとっていただきたいかというところの話に移ります。こちらが今年の4月21日に国民保護ポータルサイトという我々内閣官房のホームページのサイトで公開したものです。これをどこかで見たことがあるという方、手を挙げていただけますでしょうか。大分、手が挙がるようになってきたと思います。これはなかなか皆さんに周知が進まなくていろいろ苦労しております。実は今日から、新聞の広告やテレビCMを始めましたし、あとインターネットのページにも出るようになりましたので、ご覧いただければと思います。次に我々の方でお願いしていますのは、まず大原則として速やかな避難行動と正確かつ迅速な情報収集という、矛盾はするのですが、落ち着いて素早く避難をしてくださいということをお願いしております。では、その場合のどういった動きをすればいいのかというのは、色々なパターンによって違いますが、基本ルールとしてはこの3つを覚えていただければと思います。

まず1つ目は、屋外にいらっしゃる場合、このときにはできる限り丈夫な建物や地下に避難をしてください。この地下とは近くにある地下街や地下駅舎などの地下施設を指します。2つ目は、屋外にいるけれども近くにこういったものがない場合は、物陰に身を隠すか、地面に伏せて頭部を守ってください。3つ目は、うまく屋内に入れた場合、またはもともと屋内にいた場合には、窓から離れるか、窓のない部屋への移動をお願いします。いろいろケースはあるのですが、この基本のルールをまず、皆さんによくご理解をいただきたいと思っております。

ただこのルールだけではいろいろ細かいところが分からないということもありますので、私ども内閣官房のホームページにQ&Aというのを載せております。本日は、その幾つかを抜粋してここでご紹介をさせていただきたいと思っております。

まず、弾道ミサイルそのものの話です。先ほどもご質問が出ていましたが、ミサイルは何分位で日本に飛んでくるのかというと、これは非常に申し訳ないのですが、なかなか何

分で必ず来ますとは言えない状況であります。例えば、先ほども今年の5月に30分ぐらい飛んでいた例が紹介されていたと思いますが、打ち方とか、ミサイルの性能でどのくらいで飛んでくるのかというのは、正直分からないところがあり一概には言えないのですが、ただ1つ言えることは極めて短い時間で日本に飛来するということが言えます。例えば、昨年2月に沖縄の上空を通過した場合には、10分後に約1,600キロを飛んで沖縄の上空を通過したということです。従いまして、発射されてから飛んでくるまでの時間が非常に短いため、避難のために与えられる時間が短いということが、ミサイルへの対処の特徴の1つと言えるところであります。

あともう1点、5月はよくあれだけミサイルが撃たれて、なぜJアラートが鳴らないのかというご質問を最近よくいただいております。これに対する答えとしましては、このJアラートというのは、皆さんに危険を素早く知らせ、素早く避難をしていただくために使うものでありまして、要するに日本の領土、領海に落下する可能性や通過する可能性がある場合に使うというような形で、今運用しております。従いまして、逆に日本の領土、領海に落下する可能性や領土、領海を通過する可能性がないと判断した場合にはJアラートを使いません。そのことをご理解いただきたいと思います。

あとは、やはり日本海の海沿いの漁師さんや、漁業の関係者のいるところでは、排他的経済水域の日本海で操業しているときに落ちてきたらどうなるのだということをもものすごく気にされている方がいらっしゃいます。その方に対しましては、Jアラートは使わないのですが、違うルートを用いて船舶とか航空機に対して迅速に情報を提供しているところであります。

続きまして、実際の情報伝達についてですが、先ほど冒頭でご説明したとおり、例えば防災行政無線とか、市町村から登録されているメールとか、FM放送とか、そういったところが自動的に動いて先ほどのサイレンとかメッセージが流れてくる、これに加えて、携帯電話からエリアメール、緊急速報メールが届くというような形で皆さんのところに情報が届くことになります。

あとサイレン音についてですが、基本的にはサイレン音が鳴るものと鳴らないものがあります。例えば、市町村と契約している登録制メールなどはサイレンが鳴りませんので、こういった形でサイレンが鳴るのかとか、こういった形で自分が住んでいるところでは情報が自分に伝わるのか、これはそれぞれ住んでおられる市町村で変わってきますので、それぞれのお住まいのところにお問い合わせいただきたいと思います。

あと、先ほどご説明した特殊なサイレンの音、これにつきましては、国民保護サイレンは携帯のエリアメール、緊急速報メールの着信音ではありませんので、そこは十分ご注意をいただければというように思います。

最近、携帯電話には色々な種類があるかと思っております。ご自身が使ってらっしゃる携帯電話がきちんとエリアメール、緊急速報メールを受信できるのか、ご心配の方が多いかとは思いますが、そこは総務省消防庁でご自身の携帯が受信可能かどうかその確認方法などの対策を公表しておりますので、そちらをご覧ください、ご確認等をしていただければと思っております。



おります。

続きまして、Jアラートで情報伝達がされた場合にとるべき行動ですが、先ほどの繰り返しになりますが、ミサイルが発射されました、避難をしてくださいということと呼びかける、そのメッセージを聞いたならばすぐに近くの頑丈な建物や地下をめがけて避難を開始していただきたいと思います。そして、いよいよ落ちてくるという可能性がある場合には、ただちに避難してくださいというような情報伝達をしますので、もうすぐ落ちてくるということ念頭にその後の行動を考えていただければと思います。

そして、なぜ丈夫な建物や地下に避難するのですかと聞かれるのですが、ミサイルが落下したときに、爆風や破片などが飛び散るという可能性がありますので、その被害を避けるためには屋内に居たほうが望ましい、有効という考え方に基づいてこのようなお願いをしているところです。あと、もう1つ誤解をされがちなのですが、今、地方公共団体でいざというときにはここに避難してくださいという指定をしております、ホームページ等で情報を公開しているところがあります。必ずそこに逃げないといけないのかと聞かれることがありますが、答えは決してそうではないということでありまして、避難場所の指定をされているかどうかにかかわらず、皆さんは、その場にある、そのとき情報を受け取ったときに近くにある建物や地下施設に逃げていただきたいということです。要するに、情報が伝達されたらその周りを見て近くにある頑丈な建物や地下施設に逃げていただきたいということです。

あと、日本は木造住宅が多い国でもあり、そのときはどうなのですかというようなことも聞かれます。これもすぐ避難できるところに頑丈な建物や地下があれば避難していただければいいと思うのですが、無理をして外に出る必要もないかと思います。その場合には、屋外にいるよりも屋内のほうが安全だと思われれます。それでも窓の近くにいますと爆風で割れたガラス等でけがをする恐れがありますので、ぜひ窓から離れて、できれば窓のない部屋に移動していただきたいというように考えております。

あと、自動車を運転中にそういった警報が伝達されたらどうするかということですが、テレビ、ラジオでもこういった警報が流れることがあります。このときには車の燃料のガソリンに引火する可能性がありますので、一番いいのは車を止めて、車から離れて避難するというのが一番望ましいあり方だというように思っています。ただ、高速道路を通行している場合など、車から出るとかえって危険な場合もありますので、その場合には安全な場所に車を止めて車内で姿勢を低くするといった備えをしていただければと思っております。

あと、何々地方に落下しましたというような情報伝達があったら、その後どうしたらいいかという話です。まず、屋内避難をしていたという前提でお話をしますと、国としては続報を出しますので、引き続き屋内に避難をしていただきたいと思います。その後は、落ちたミサイルにどんな弾頭が積まれているかによって被害の状況が変わってきますので、そういったところはしっかりと国とか地方公共団体が情報収集をし、適時適切に皆さんにお伝えしますので、それを待っていただければと思います。そのためには、避難をしている間にテ

レビ、ラジオ、インターネットなどで情報収集をしていただきたいというように思いますし、行政からの指示がそういったものを通じて出される可能性がありますので、それに従っていただければと思います。もし近くにミサイルが落ちた際には、屋内にいる場合は、その空気が外から入ってくるのを止めるということが必要ですし、屋外にいる場合には、その現場から離れて屋内をめざして逃げるとか、あとは風上に避難するというをお願いできればというように思っております。

あと、避難訓練をしたいのですがという話があるかと思えます。例えば、うちの職場や学校でこういったメッセージを聞かせたい、サイレンを聞かせたいというようなお問い合わせがあります。国民保護サイレンについては、国民保護ポータルサイトで確認できますので、周知に使っていただくのは構いませんが、ただ周りの人がびっくりして慌てることのないように、これは訓練ですというようなことがしっかり分かるようにして使っていただければと思いますし、今、各地方も全国的にこういった避難訓練をされ始めていますので確認いただければと思っております。

今、申し上げた情報は内閣官房の国民保護ポータルサイト、こちらに載せておりますので、ご覧いただければと思います。こちらのほうに、スマートフォン対応というバナーが設けられていまして、ここをクリックするとスマートフォンでも見やすいようなページを作りましたので、是非ご確認いただければと思います。

最後に、避難訓練の話を少しさせていただければと思います。今年の3月17日に秋田県の男鹿市で初めて国と秋田県及び男鹿市と共同で避難訓練を行いました。これは昨年8月3日に初めて日本の排他的経済水域に弾道ミサイルが落下するとか、そういった北朝鮮のミサイルの動きが活発化していることを踏まえて、情報の伝達と、どのような行動が必要なのかを国民の皆さんに理解していただきたいということで初めて行ったものです。ニュースとかでご覧になった方もおられるかもしれません。ただ、その後も北朝鮮のそういったミサイルの動きは止みませんし、国民の皆さんが弾道ミサイル、そしてその対処についての関心が非常に高まっているということを受けまして、今年4月19日に、全国の都道府県にミサイルを想定した訓練をぜひ実施をしてくださいというお願いをしたところです。

そのときにどのような訓練をお願いしたいかというのが次のページの資料で、是非、より実際に近い場面を想定した訓練の実施というものをお願いしております。やはり実際に近い場面を想定して訓練を実施することによって、本当にそういった場面に遭遇したならばどうしたらいいかということをご理解いただく効果が上がるだろうと考えております。例えば避難先を予め決めないでその場で判断していただくとか、避難先に間に合わない場合を想定した訓練を実施するとか、自動車を運転中の住民も参加する訓練とかも考えていただきたいというようにお願いしておりますし、あとは、地下がある場所で訓練をするということも考えてくださいということをお願いしております。

また、これは住民に直接ではないですが、地方公共団体、警察、消防等の活動についての訓練も是非実施してくださいというお願いをしているところです。そういったことを受け

ていただきまして、今、全国で訓練が少しずつ行われ始めております。今年度になってから、国と地方が共同で実施しているものが4つあり、山口県、山形県、新潟県、福岡県で実際に訓練が行われました。あと7月14日に富山県高岡市で行われるということはこの時点(平成29年6月13日現在)で公表していましたが、この後、愛媛県西条市と長崎県雲仙市というところでも実施するということが公表されておりますので、7月10日から20日にかけて、3団体でまた新たに訓練が行われるということになっています。また、国と地方の共同訓練の他にも地方公共団体が単独で訓練するという動きも広まっておりまして、青森県むつ市や、福岡県大野城市、広島県福山市というところのほか、恐らく今日行われていると思いますけれども、静岡県下田市とか、あと山口県岩国市でも訓練が行われております。また、避難を伴わないけれどもサイレンだけ住民の方に聞いていただくとか、メッセージだけ聞いていただくとか、そういったことが今、全国各地で行われつつあります。

それと参考までに、今年度になって実施した訓練の様子をご紹介します。これは山口県で6月4日に実施した訓練で、日本海側の萩市の近くにある阿武町というところで実施しました。小学校の児童さんとその親御さん、あと地区の住民の方に参加していただきました。防災行政無線でサイレンとメッセージを伝達して逃げていただくという訓練で、ポイントとしては幾つかありますが、小学校の体育館であったり、役場であったり、体育センターであったり、ここに逃げてくださいという候補は決めましたが、実際に個々の参加者がどこに逃げるかは、その場で置かれた状況で判断をしてくださいという形で訓練を実施しました。その結果、体育館に逃げた人もいたし、役場に逃げ込んだ人もいたし、体育センターに逃げた人もいました。このように、それぞれ皆さんが自分の置かれた状況で、どこが一番早く確実に安全に避難できるかということを考えて逃げていただくという訓練を実施したものです。

続きまして山形県酒田市で6月9日に実施した訓練です。ここは西荒瀬という地区で訓練をしまして、小学校であったり、保育園であったり、あとは介護施設であったりということで、0歳から94歳までという範囲の住民の方が参加をしていただいた訓練です。メッセージを流して頑丈な建物のコミュニティセンターや、小学校、介護施設に逃げていただきました。そこで、屋内に避難が間に合った方がこう逃げたのですが、ちょっと遠くにいて、丈夫な建物に間に合わないというように判断をされた方はその場で物陰に隠れるなどの行動をとっていただきました。これは住宅のブロック塀の陰に隠れていただいておりますし、これは道路の立体交差の下の部分、丈夫なコンクリートの構造物があるので、その陰に隠れている方です。その置かれた場所に皆さんで判断をして、こういう避難をしていただいたという形になっています。

あと6月12日に新潟県の燕市という所で訓練を実施しました。ここの地区は本当に純粋な田園地帯でありまして、いわゆる丈夫な建物というような大きな建物が無いような地域でありましたし、例えばこのように農作業をしている方は、短い時間ではなかなかそういった屋内に逃げられないような状況で訓練を行いました。その結果、例えば灌漑用の側溝の

ような丈夫な建造物の陰に隠れるとか、コンクリートの用水路にかかった橋の下に隠れるとか、あと農村地帯ですと円筒形のコンクリートのものがありますので、そこに隠れるとか、農機具小屋に隠れるとかということもしていました。あと元々自宅にいた方は自宅の中なるべく窓から離れて、ガラスなどでけがをしないように座布団を頭にかぶって避難するというようなことをしていただいております。

用意した資料の説明は以上です。最後にまとめとして一言申し上げたいと思います。弾道ミサイルが日本に飛来する可能性がある場合に、こういった情報を伝達して、こういった行動をとってくださいということをお話させていただいたわけですが、ぜひ皆さんにご理解していただきたいのは、政府としては落ちてくることを大前提として、いろいろ対策をとっているわけではありません。まず大事なのは、他の国とも協力をしてまずそういったミサイルを撃たれるというような事態にはならないように努力するということが当然そのための努力をしておりますし、仮にそういった外交努力が実を結ばなかったとしても、先ほど第1部でご講演いただいたように、日本に落ちてこないようにしっかりと迎撃するというような体制で準備をしているということを前提として、今、申し上げたようなことも行っているということをご理解いただきたいと思います。ただ、その外交努力にしる、防衛努力にしる、100%完璧には残念ながらいかないものでして、皆さんの安全を守っていただくためには、正しい情報を正しく理解していただいて、いざというときはご自身で動いていただくということもお願いしなければならないということで、こういった取り組みをしているということを最後にお願い申し上げまして、私のお話とさせていただきます。ご清聴どうもありがとうございました。

#### 【司会】

ありがとうございました。それでは、ただいまの講演内容に対してご質問のある方は挙手をお願いします。

#### 【質問者1】

2点質問がありまして、1点目ですが、Jアラートの伝達について、日本の領海に落下する場合はまず、発射情報が出て、その後ただちに避難という情報が来ることなのですか。けれども、落下した場所の情報については、実際に落下した後からしか場所の情報が来ないということでもよろしいですか。

#### 【伊藤内閣参事官】

今のところJアラートで流す情報として、どこに落ちますというところは、その落下情報で初めて入ってくるようになります。ただ、Jアラートというのは、そのミサイルが飛んでくる場合に、そのミサイルが飛来する恐れがある日本の地区地方、そこに流すので、例えば九州に飛んでくるときに、まず飛んでこないと思われるような地方に流すというこ

とはしておりません。そのようにご理解いただければと思います。

**【質問者 1】**

ありがとうございます。2点目については、先ほどとかぶるのですが、どこに落ちてくるのかというのは、都道府県ではなくて地方単位でということでもよろしいでしょうか。

**【伊藤内閣参事官】**

Jアラートを運用する場合には、迅速に情報を伝えなければならないということもありまして、ある程度のところの絞り込みをした段階で情報を伝達しますから、基本はいわゆる関東なら関東地方という単位に、周辺の県とかをくっつけたような範囲で情報を流すというような運用になるかと思えます。

**【質問者 2】**

まず1つは、政府としてはこのミサイルが落ちてくる確率というか、危険性をどのように捉えられているのでしょうか。僕の周囲の人間といろいろ話しても、結局絵空事と言いますか、迎撃はなかなかできない。その中でJアラートの話だとかというのが出てくると、一体政府は本当はどのくらいの危険性を感じて、国民に対してこういうことを言っているのかお聞きしたい。

もう1つあるのですが、Jアラートは本当に落ちる前に鳴るのか、それとも落ちてからしか鳴らないのかという、そこをもう少しお伺いしたい。

それからもう1点は、もし万が一僕のところ落ちたときに、政府は仇をとってくれるのかということをお伺いしたい。

**【伊藤内閣参事官】**

まず、第1点目は、今まで日本政府はどのような危険性を感じているのかということ、どのくらい認識を持っているのかというご質問ですが、そこはなかなかこの場で私が政府を代表してお答えする立場にないので申し上げられないのですが、こういった危機管理の話というのは、万が一の場合をきちんと想定して、皆さんに正しく理解をしていただくということが重要だという考えのもとで、このJアラートという仕組みの整備からその運用、そしてその周知をしていくというようにご理解いただければと思っております。

2点目は、Jアラートがきちんとミサイルが落ちてくる前に鳴るのかということなのですが、そこは鳴るようにすべく、我々は最大限努力をしているということです。幸いなことに日本に落ちた事例は今までございませんが、今まで通過した事例、Jアラートを使った例が2件ございまして、それはきちんと通過する前に発射された情報は流しているというように思います。

3点目の仇をとるのかということですが、そこはちょっとなかなか私の口からは申し上

げられないのでご勘弁をいただければと思います。

**【質問者 3】**

大事なことを聞きたいのですが、日本の震が関にミサイルが着弾したという場合、電気がとまる、インターネットは使えない、国民は動けない、そういった場合、日本の場所に、何万、何十万という地下防空壕を作るべきだと思うのですが、どうお考えですか。

それと、ミサイルの弾頭にマスタードガスが搭載されていた場合、日本人は何万人死ぬのか、その辺をどう考えているのか、どう対策しているのか、それをお聞きしたいのですが。

**【伊藤内閣参事官】**

まず、対策としては避難をお願いしています。一時的に待避すべき場所をどう整備するかというのは、課題の1つだと思いますけれども、そこは色々な要素があるかと思うので、そういった要素を総合的に判断してどのような退避の場所をつくるのかという議論はされていくべきだと思っています。

2点目のご質問につきましては、そもそもどんな被害が生じるかというのは、どのようなミサイルが発射された場合とか、どのくらいの量が入っていると、種々の要素によって変わってきます。一概には申し上げられないということで、ご容赦いただければと思っています。

**【質問者 4】**

弾道ミサイルが我が国に落下する可能性があるというように書かれているのですけれども、これはミサイルを迎撃できない場合があるというようにも捉えられているように、完全ではないと思うのですが、弾道ミサイルを迎撃できない場合というのは、どんな場合なのでしょう。

**【伊藤内閣参事官】**

すみません、私の所管外なのでそこまでお答えすることは差し控えさせていただきたいと思いますが、必ず迎撃されるということを前提として、そういった情報伝達は必要ないという考え方もなかなか難しいかと思います。迎撃できない場合を想定したオペレーションというのを考えて対策をとる必要があるという考え方のもと、このようなことも行っていくということでご理解をいただければと思っております。

**【質問者 5】**

Jアラートは、聴覚に訴えるものですが聴覚に障害を持つ方や、ご高齢で聴きとることが困難な方もいらっしゃると思います。これらの方々に対しては、どのようにミサイル情報の伝達を行いますか。よろしくをお願いします。

【伊藤内閣参事官】

まさにそこが情報伝達手段の多重化の必要性であるかと思います。例えば電子メールとか、携帯電話のメールとか、そういった色々な手法を組み合わせるといった情報伝達の漏れが少なくなるような取り組みが必要だというように考えています。

【質問者 6】

先ほど本日から政府広報のCMが流れているというお話でしたが、実は私も拝見したのですが、CMでやるのは非常にいいことだなと思ったのですが、肝心の国民保護の警報音がCMの中で含まれていませんでした。残念なことにCMにおいても国民保護ポータルサイトを見てくださいます、あるいは国や自治体に聞いてくださいますというトーンになっていたのですが、しかしながら、ここにいるセミナーに来られている皆様のように前向きに取り組んでおられる方は当然そういうことをやると思うのですが、大多数の国民は実際にそのCMを見てもポータルサイトを見たりとか、自治体に問い合わせたりはしないと思うのですね。そういった場合、なぜその絶好の機会であるCMで、サイレン音をどう普及するかということをしなかったのか、ちょっと理由をお聞きしたいのですが。

【伊藤内閣参事官】

やはりテレビのCMには時間が限られていますので、その中でどの情報を伝えて、どの情報を残念ながら伝えることを排除するのかということをしるべきだと検討して今の案になったというようなことです。今日私がお説明したこの3つの行動を絵にしてCMを流したというように思いますが、今、我々としては情報が伝達されたらこういう行動を取ってくださいということを、まず今は第一に皆さんに理解していただくべきだということを考えてあのCMにしていると思います。残念ながら限られた時間ですので全てをお伝えするというわけにはいきませんので、詳しいことはホームページなり、近くの自治体にお問い合わせくださいというようなところを申し上げたところです。

あと、サイレン音なのですが、なかなか意見が分かれるかと思います。今、おっしゃられたようにせつかくの機会だから知らせるべきだというご意見の方も結構ありますが、いきなりCMを流したらみんなびっくりするじゃないかというようなご意見もあるかと思います。そういったことを総合的に判断して、今の形になっているということでご理解いただければと思います。

【質問者 6】

先ほどのQ&Aの15ページには混同しないように注意して周知してくださいというQ&Aがありましたので、ぜひサイレン音を一括して鳴らしていただければ、多分、国民としても非常に助かるのではないかと思いますので、ぜひご検討をお願いいたします。

【伊藤内閣参事官】

貴重なご意見として承ります。

【質問者 7】

ロシアと北朝鮮と中国が、手を結んで日本を攻め込んできた。ロシアは今、北方領土に飛行場を作っている。北海道が占領された。そして北朝鮮は中国の子分であるから日本にミサイルを撃ちこむ。ミサイルを撃ちこんだ場合、日本が属国になってしまうのか。どのように日本の自衛隊と警察は、国民の安全を守るのか、その辺を聞きたいのですが。

【伊藤内閣参事官】

いろいろと複雑な仮定の話となりますので、私の方からはお答えを差し控えさせていただきたいと思いますが、ただ、日本政府としましては、国民の方の生命、身体、財産、これを守ることが仕事の一番の重要なものだと思っておりますので、こういった場面になろうとも、そういった国民の方の生命、身体、財産を守るために最大限のことをするという回答でご容赦をいただければと思います。

【質問者 8】

細かい話ですが、先ほど警報音の周知徹底ということもありましたし、もう1つ、避難の際に自治体が推奨する避難場所、これをということだったのですが、それも概論的には表示ですとか、あるいは我々街を歩いていても、誰が見ても、あそこは避難場所に相当する場所だというような表示、掲示というようなものは検討いただいているのでしょうか。

【伊藤内閣参事官】

避難場所として指定した所を皆さんに分かりやすくするための取り組みというのは、検討課題の一つだと思っておりますが、今のご指摘にありました表示とかマークとかということの具体的なやり方というところまで至っていない状況です。ただ、一点だけ少し補足をさせていただきますと、多分、イメージ、類似しているものとしては、埼玉県にはありませんけれども、海のところには津波避難ビルとかというようなものに表示はしているところもあると思います。ただ、そういった津波とこの弾道ミサイルの対応の一番大きな違いというのは、多分そういった情報に接してから避難にかけられる時間が圧倒的にミサイル対応は少ないということに大きな違いがあると思います。そのことを考えると、指定のある建物にしか逃げられないというのは実はそうではなくて、指定がなくても逃げられるところがあればそこに逃げてくださいというのが、今我々がお願いしているところであり、そういったことを踏まえまして、指定のあり方とか、その周知の仕方というのは考えていくべきではないかと思っておりますので、指定されているかにかかわらず、今自分



が置かれた場所で逃げられる場所があった場合には、そこに逃げるということをぜひご理解いただきたいと思います。

**【司会】**

お時間となりましたので、これで第2部の講演を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

これを持ちまして本日の防衛問題セミナーを終了いたします。本日はお忙しいところご参加いただきまして誠にありがとうございました。なお、お帰り際には、受付でお渡ししましたアンケート用紙にぜひご回答のほど、ご協力をよろしくお願いいたします。